3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(1) 鵜住居地区（鵜住居町第７～19、23～29 地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成 23 年２月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年３月３日実施）	
			犠牲者数（平成 25 年１月 22 日）	全壊・半壊家屋数（平成 25 年６月現在）			
神ノ沢 新　田 上　通 仲　町 川　原 新川原 日　向	3,276 人	1,338 世帯	348 人	全壊 757 件	半壊 112 件	330 人	24%（対象地区：鵜住居町第 11～12、14～19 地割合算人口/1,399）

2) 震災当日の津波避難行動実態

【上町】
- 地震の揺れがただごとではなかったことから、比較的早い時期からリュックサックを背負い、避難場所に避難した方もいた。
- 地震後、家の前に立って周囲の状況をうかがい、避難すべきかどうか、迷っているように感じる方も多かった。
- 多くの地域住民の方は、常楽寺境内及び防災センターに避難した。仲町の住民は防災センターに避難した。
- 常楽寺境内に避難後、津波が襲ってきたので、車に相乗りするなどして、更に高台に避難した。一部の高齢者は這いつくばって避難した。
- 住民が一緒に逃げようと声がけしたが、家に留まりそのまま流された方、車で他地域へ避難中、車ごと流された方、一人暮らしの高齢者が流されたりした。

【川原】
- 地震が大きかったことから、一部の住民は、比較的早く避難した。避難の途中、「津波が来る、来ない、来たとしても少しだろう」などと話しあっていた住民もいた。
- 一部の消防団員は、高齢者を背負うなどして避難を支援した。
- 防災マップの浸水シミュレーションでは、津波が来ても、せいぜい長内橋付近までだと思っていた。まさかここまで来るとは予想することができず、避難せずに流された方も多かったのではないか。
- 渋滞中の車を津波が襲い、車ごと流された方もいた。

【新川原】
- 新川原では、地震直後、多くの住民が高台に逃げようとした。大きな揺れだったため、外に出なければいけないと思ったが、まさかここまで津波が襲来するという意識はなかった。
- 寝たきりの方の避難に手間取り、それを手助けした方がともに流されたり、高齢の家族を背負って避難した家族がともに流されたりした。

3) 震災以前の備え

【上町】
- 防災センターが設置される以前は、常楽寺を避難場所として訓練していた。
- 避難訓練時、常楽寺を利用した回数は多かったが、震災のほぼ１年前に防災センターが完成したことから、「避難所」としての印象が強かった。防災センターでは、救急措置等、屋内で行う訓練を行っていた。防災センターには鍋、釜又は食糧等の防災備蓄品があり、多くの住民はここに避難すれば大丈夫と感じていた。

- 町内会では、地域の防災意識、避難訓練の参加率を高めるため、救急担架による搬送、消火訓練を想定したバケツリレーなどを取り入れた防災運動会、町内会主催の避難訓練を実施したことがある。

【川原】
- 鵜住神社に乾パン、ロープなどの防災備品が備蓄されており、今回の災害でも有効に活用された。
- 避難訓練に参加していた方は、日頃から避難場所を理解していたと感じる。ただし、これまでの避難訓練の参加率は低かった。

【新川原】
- 町内会では震災以前、災害時の炊事班、救護班等の役割を決めた防災訓練を実施する予定だったが、台風が重なって中止となったため、実施に至らなかった。
- 通常の避難訓練では本行寺の避難場所に集まっていた。

4) 問題点・課題の整理

- 「ここまで津波が来ると思わなかった」住民が、避難が遅れたり、避難できずに被災したことから、想定にとらわれず、地震が来たらすぐに高台へ避難することを徹底する。
- 要援護者を援助している途中で被災してしまった住民も少なくなかったことから、地域単位で支援方法を検討する必要がある。

釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（1）鵜住居地区（南部）

地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.2.18実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

津波の流れや大きさ

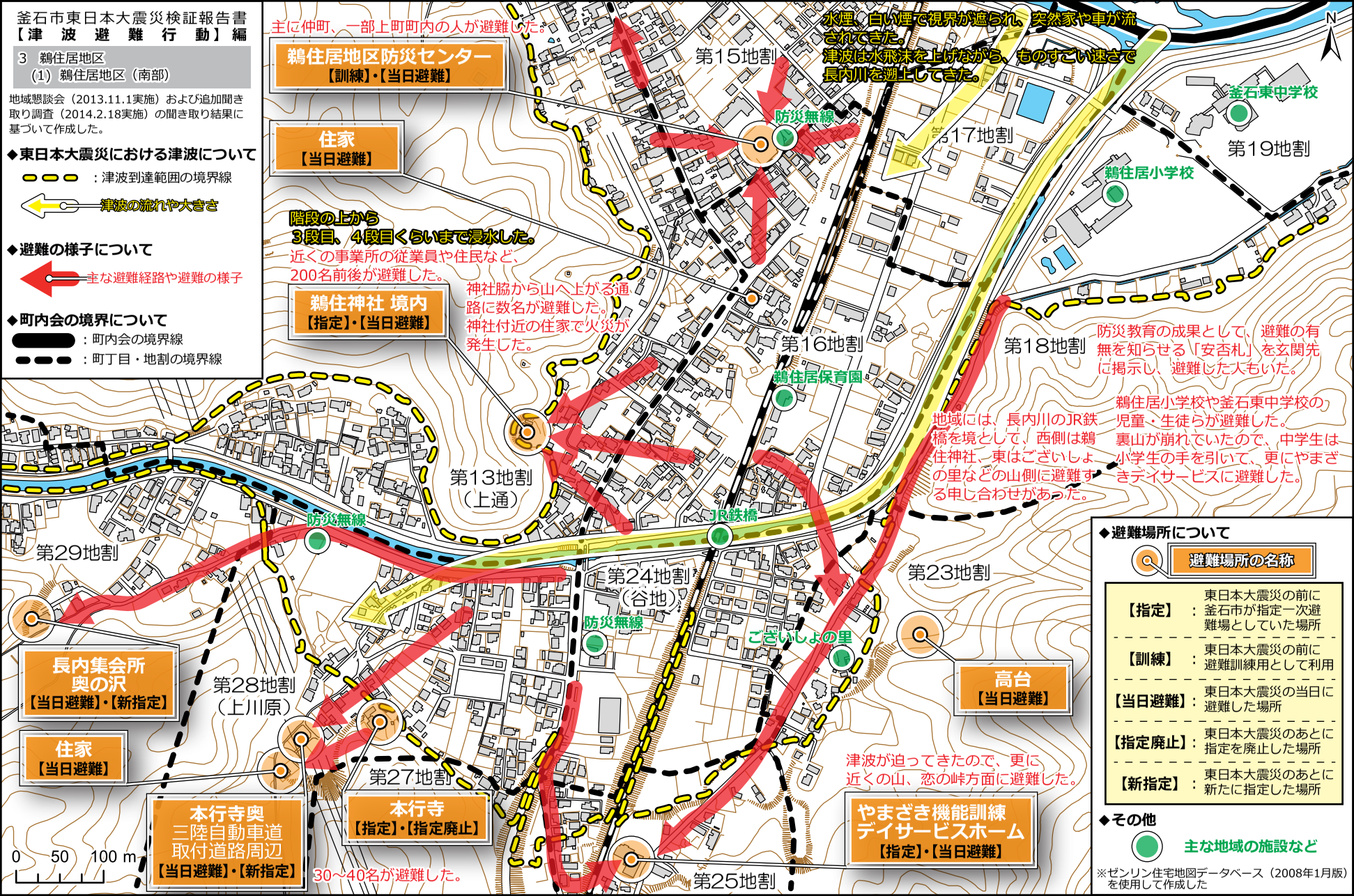
◆避難の様子について

主な避難経路や避難の様子

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線



◆避難場所について

避難場所の名称

【指定】	：	東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】	：	東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】	：	東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】	：	東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】	：	東日本大震災のあとに新たに指定した場所

◆その他

主な地域の施設など

※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した

釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
(1)　鵜住居地区（南部）

地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.2.18実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

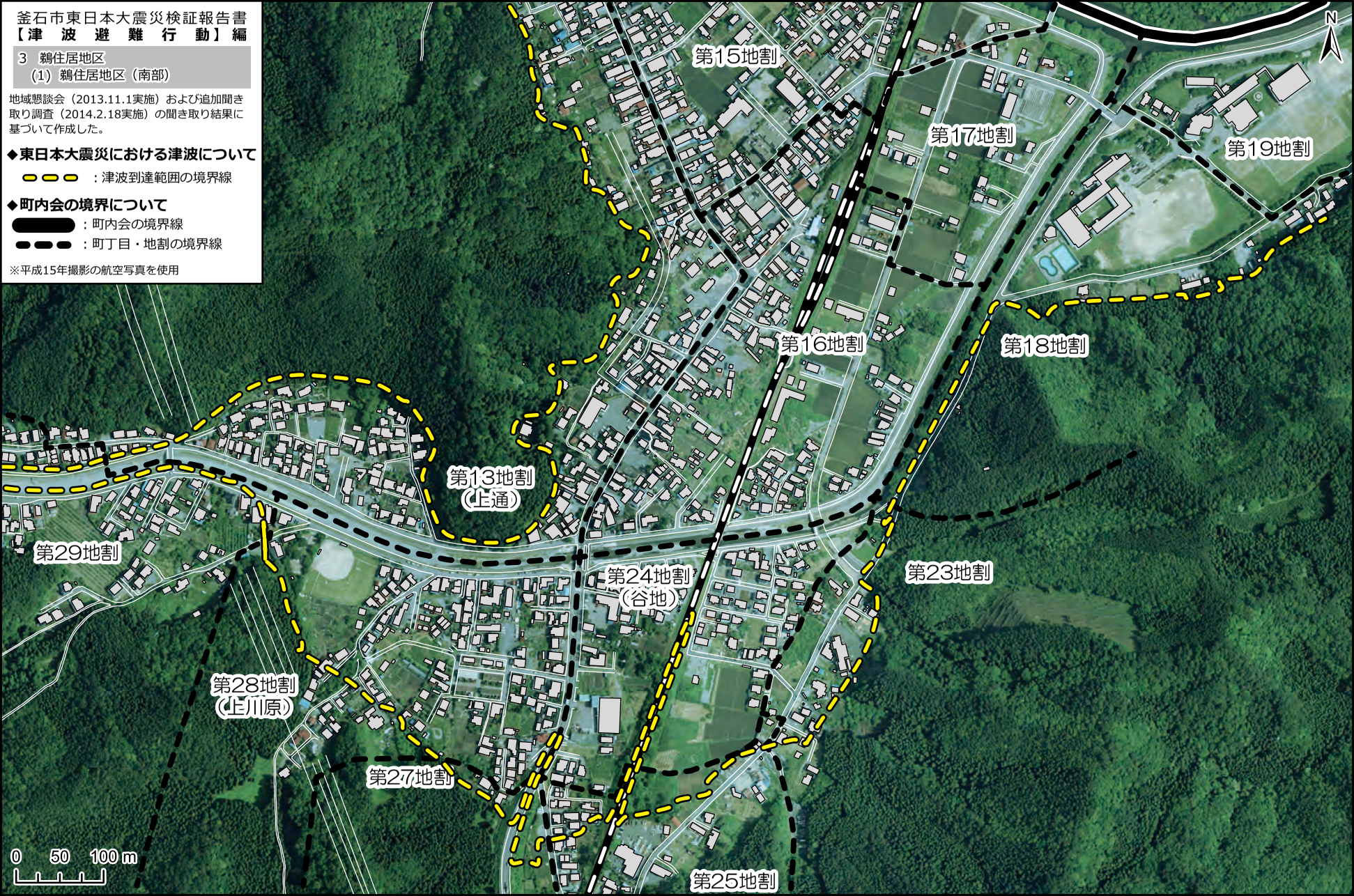
：津波到達範囲の境界線

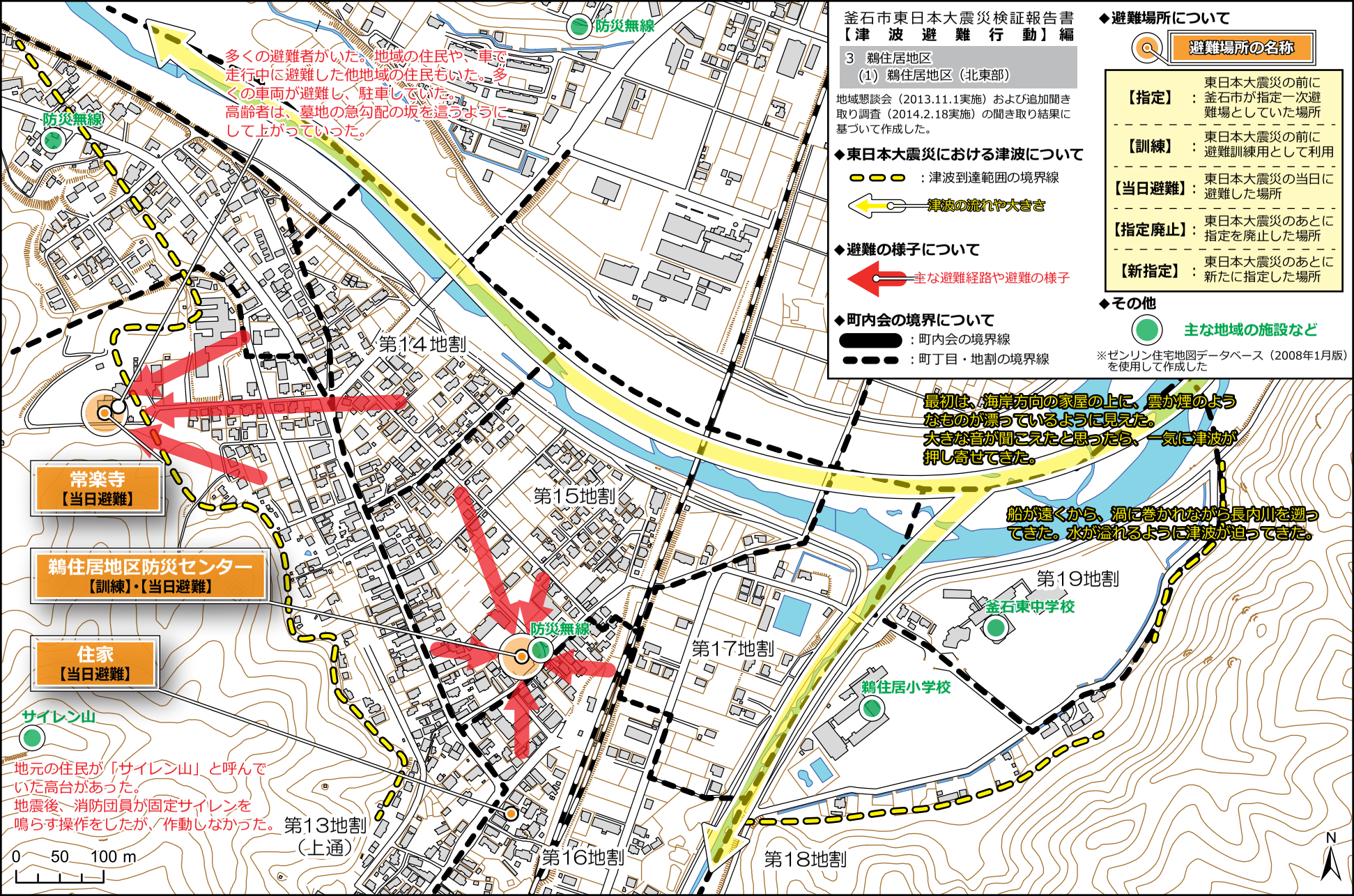
◆町内会の境界について

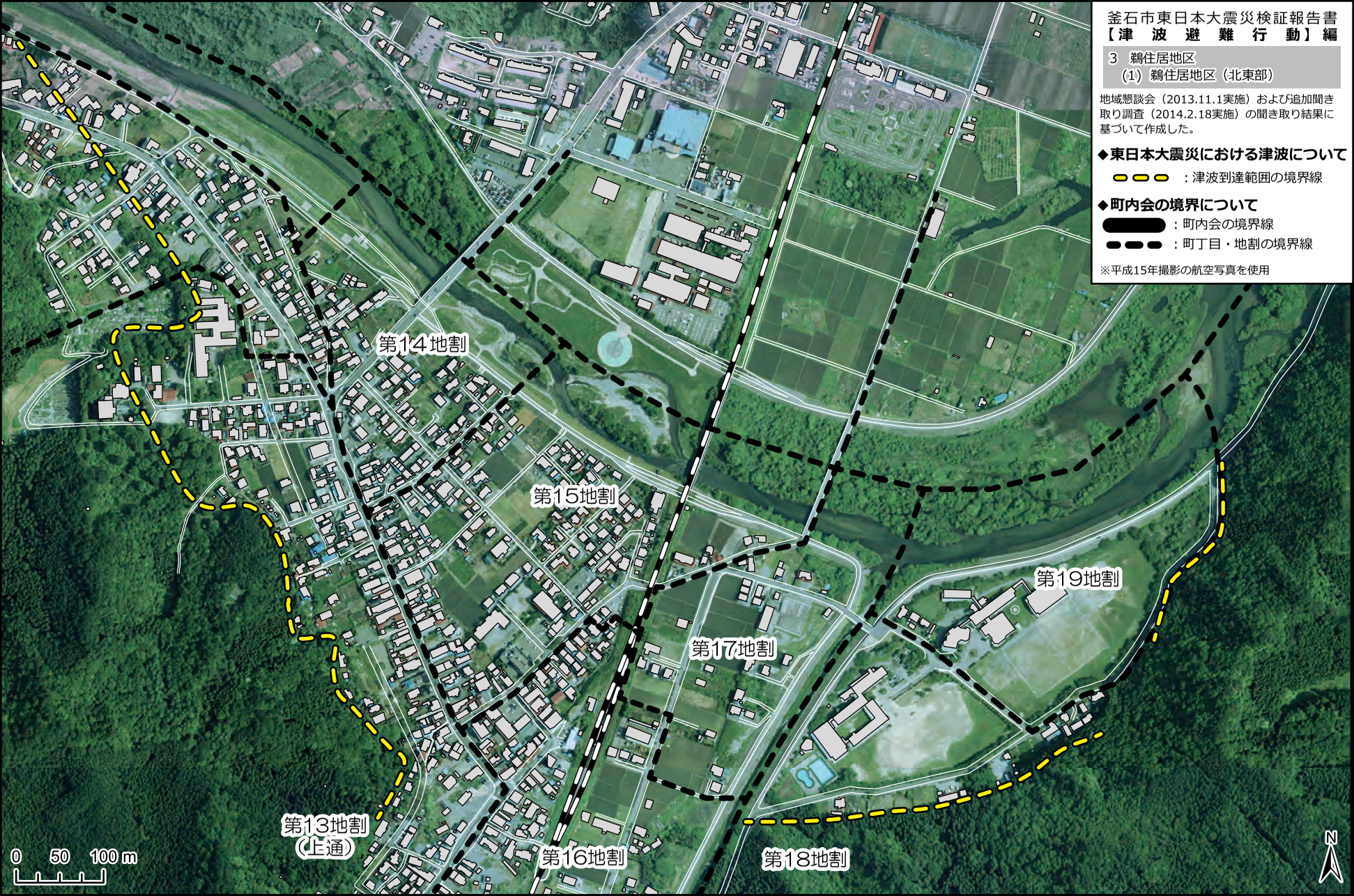
：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用




釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編
3　鵜住居地区
（1）鵜住居地区（北東部）
地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.2.18実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。
◆東日本大震災における津波について
：津波到達範囲の境界線
津波の流れや大きさ
◆避難の様子について
主な避難経路や避難の様子
◆町内会の境界について
：町内会の境界線
：町丁目・地割の境界線
◆避難場所について
避難場所の名称
【指定】：東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】：東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】：東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】：東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】：東日本大震災のあとに新たに指定した場所
◆その他
主な地域の施設など
※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した
防災無線
防災無線
防災無線
多くの避難者がいた。地域の住民や、車で走行中に避難した他地域の住民もいた。多くの車両が避難し、駐車していた。
高齢者は、墓地の急勾配の坂を這うようにして上がっていった。
第14地割
第15地割
第17地割
第19地割
第13地割（上通）
第16地割
第18地割
最初は、海岸方向の家屋の上に、雲か煙のようなものが漂っているように見えた。
大きな音が聞こえたと思ったら、一気に津波が押し寄せてきた。
船が遠くから、渦に巻かれながら長内川を遡ってきた。水が溢れるように津波が迫ってきた。
釜石東中学校
鵜住居小学校
常楽寺
【当日避難】
鵜住居地区防災センター
【訓練】・【当日避難】
住家
【当日避難】
サイレン山
地元の住民が「サイレン山」と呼んでいた高台があった。
地震後、消防団員が固定サイレンを鳴らす操作をしたが、作動しなかった。
0　50　100 m
N


釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編
3　鵜住居地区
（1）鵜住居地区（北東部）
地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.2.18実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。
◆東日本大震災における津波について
：津波到達範囲の境界線
◆町内会の境界について
：町内会の境界線
：町丁目・地割の境界線
※平成15年撮影の航空写真を使用
第14地割
第15地割
第19地割
第17地割
第13地割
（上通）
第16地割
第18地割
0　50　100 m
N

3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(2) 根浜地区（鵜住居町第 20～22 地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成 23 年 2 月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月 3 日実施）	
			犠牲者数（平成 25 年 1 月 22 日）	全壊・半壊家屋数（平成 25 年 6 月現在）			
根　浜	173 人	67 世帯	14 人	全壊 75 件	半壊 1 件	17 人	10%（対象地区：根浜）

2) 震災当日の津波避難行動実態

- 住民同士で声がけをしながら、それぞれ近くの高台に避難した。また、東の沢周辺は地形的に海の状況を確認できる場所なので、海の様子を見ながら避難することができた。
- 高齢者の中には、チリ地震津波等の経験にとらわれてしまい、今回のような大きな津波は来ないという思い込みがあり、避難せずに流された方もいた。
- 地震発生後、持ち船を心配し、海岸に下がった方、一度避難したが、物を取ろうと家に戻り、流された方がいた。
- 他の住民に避難誘導の声がけをして、流された方もいた。
- 避難訓練に参加しない方の多くが亡くなった。避難せず家の中にいた。

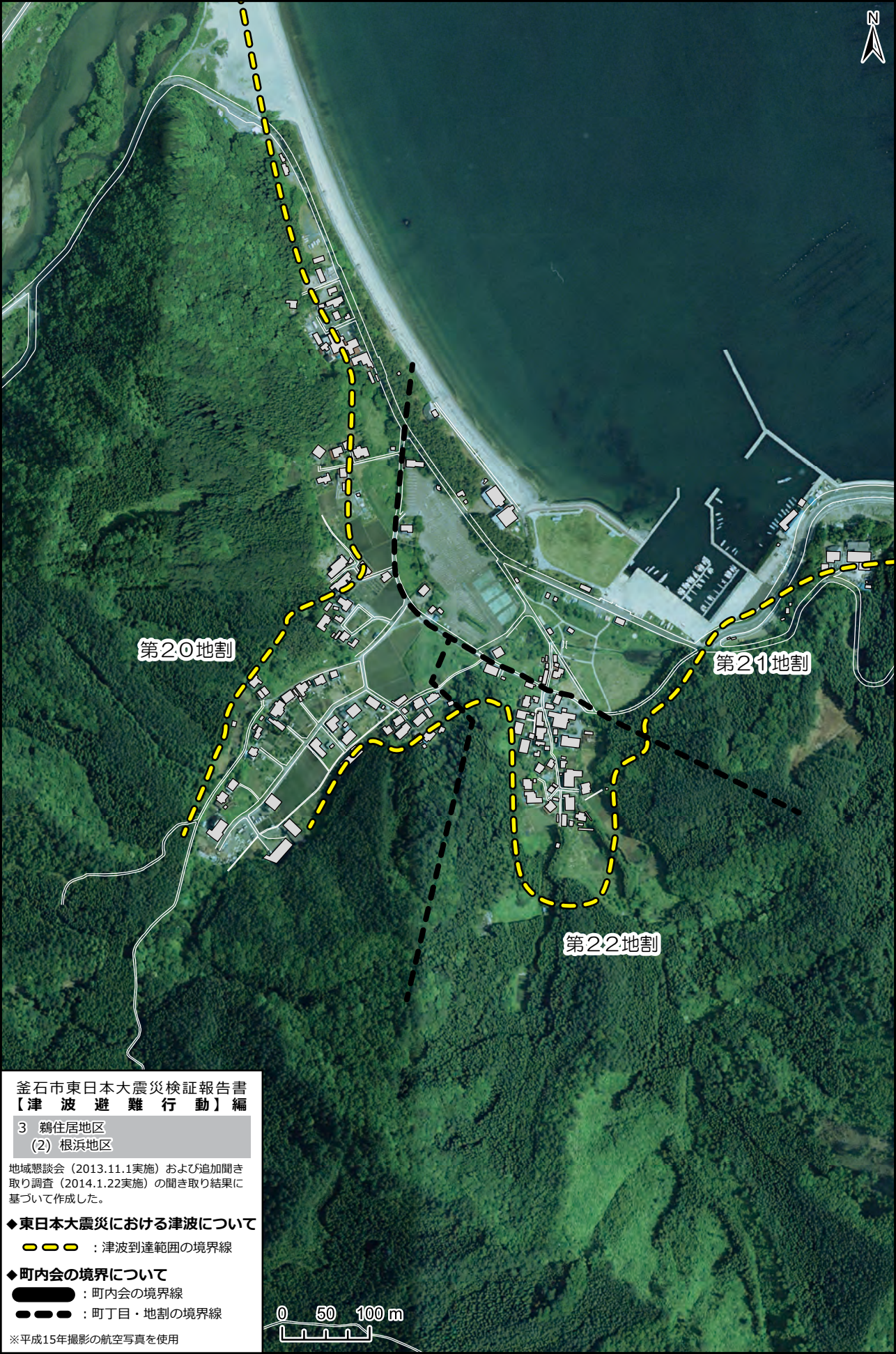
3) 震災以前の備え

- 平成 15 年１月に自主防災組織を設置し、津波に対する様々な取り組みを実施した。
- 震災の５～６年前から、避難訓練の際には一時避難場所へ避難していたものの、実際に避難する時は各自近くの高台へ逃げるということを徹底した。その後、避難場所へ集まるということを地域で取り決めていた。

4) 問題点・課題の整理

- 過去の被災経験にとらわれず、地震が来たらすぐに高台へ避難することを徹底する。
- 避難訓練時から、実際の状況を想定し、近くの高台へ避難することを徹底する。

N
片岸町内会のほうにぶつかった波が流れてきたり、
多方向から波が跳ね返ってきたりした。
第１波で5mの防潮堤を
越えるのが見えた。
沿岸から離れた小島まで歩けるくらい水が引いていた。
津波来襲後、小島は陥没して消えた。
裏山へ避難するよう誘導した。
避難訓練のときには、周辺住民で
神社へ避難するように決めていた。
宝来館
【当日避難】
4～5名が避難した。
その後、裏山を越えて
宝来館まで避難した。
第20地割の裏山
【当日避難】
宝来館まで車で
避難した人もいた。
指定避難場所ではなく
裏山に避難する習慣があった。
2～3名が避難した。
第20地割の裏山
【当日避難】
防災無線
広場
【訓練】
第２０地割
第２１地割
6～7名が避難した。
山
【当日避難】
畑
【当日避難】
海を眺めていた人がいた。
東の沢へ避難した。
山
【当日避難】
照明設備が流出するほどの
浸水被害があった。
数名が避難した。
根浜富王姫神社 境内
【指定】
東の沢
【指定】・【当日避難】・【指定廃止】
20～50名が避難した。
釜石電装前の広場
【当日避難】
数年前から避難場所として使用
していない。
震災時、避難者はいなかった。
境内は浸水した。
約７名が集まった。
第２２地割
峰
【当日避難】
峰に上がって、
海の様子を眺めた。
東の沢奥 根浜墓地
【当日避難】・【新指定】
約50名が避難した。
0 50 100 m
釜石市東日本大震災検証報告書
【津 波 避 難 行 動】編
3 鵜住居地区
(2) 根浜地区
地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.1.22実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。
◆東日本大震災における津波について
：津波到達範囲の境界線
津波の流れや大きさ
◆避難の様子について
主な避難経路や避難の様子
◆町内会の境界について
：町内会の境界線
：町丁目・地割の境界線
◆避難場所について
避難場所の名称
【指定】：東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】：東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】：東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】：東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】：東日本大震災のあとに新たに指定した場所
◆その他
主な地域の施設など
※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した



釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
(2)　根浜地区

地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.1.22実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用

3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(3) 両石地区（両石町第１～３地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成23年2月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成23年3月3日実施）	
			犠牲者数（平成25年1月22日）	全壊・半壊家屋数（平成25年6月現在）			
両　石	614人	261世帯	45人	全壊231件	半壊3件	99人	16%（対象地区：両石町）

2) 震災当日の津波避難行動実態

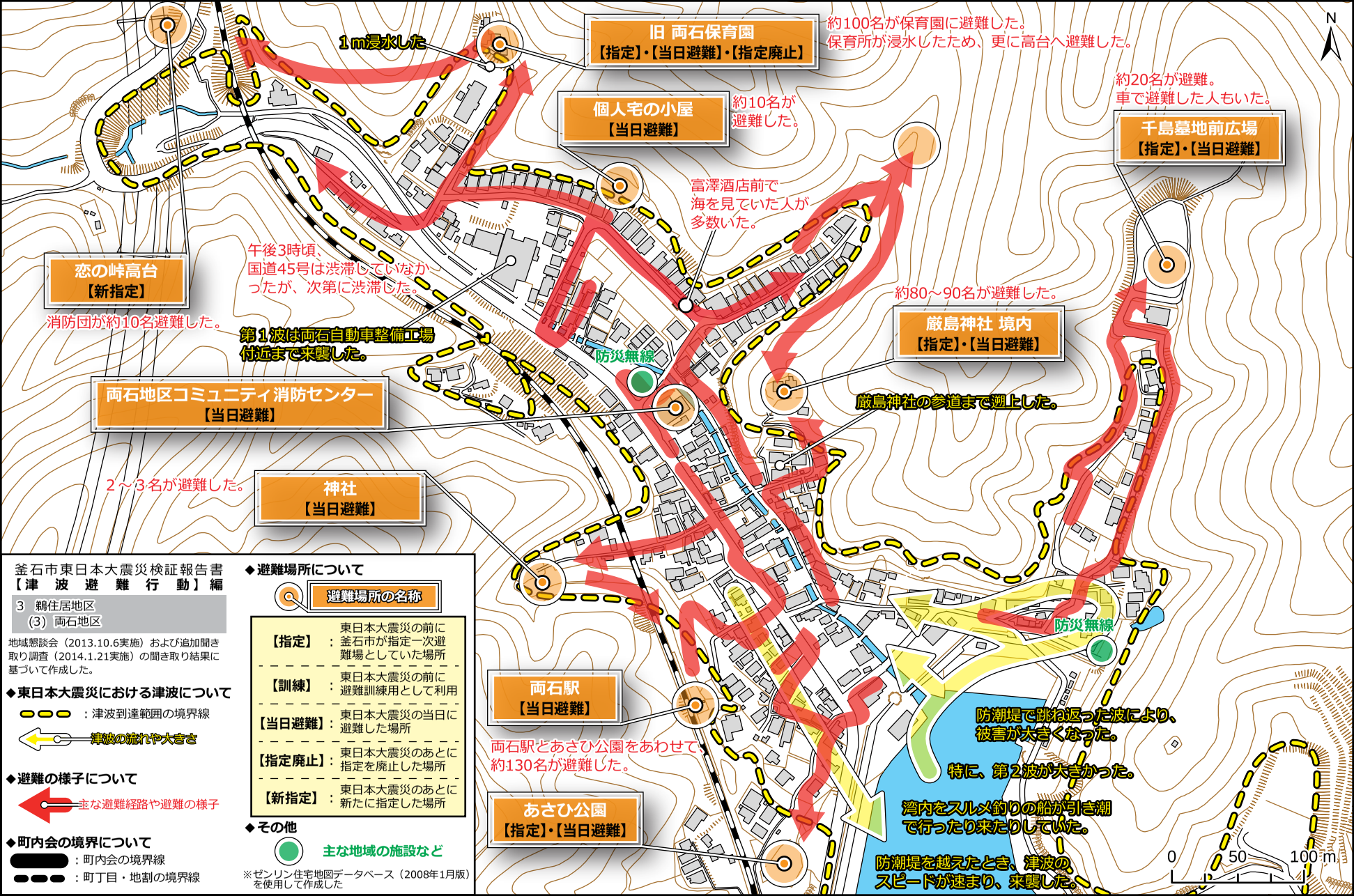
- 大津波警報３m以上（位）との防災放送により、過去の津波のことから命の危険性はないと判断し逃げ遅れた方は数名いたものの、近所の呼び掛けや率先避難により地震発生後、25分前には99%避難した。
- 明治・昭和三陸大津波後に造成された場所（２号地から４号地まで）の住民は自宅が高台にあるため、津波を甘く見ていた部分があった。また、国道沿いや海岸付近の住民のうち約30名が２号地にある実家や親戚のもとへ避難し、犠牲となった。
- 第１波が想定内の規模であったことにより、第２波以降の津波に対する油断があった。
- 漁村センターから海岸付近までの地域は迅速に避難したが、センターの上にある地域はしばらく避難しなかった。
- 町内会では避難訓練を通じて、命てんでんこにおける率先避難及び早期避難の重要性を教えてきたため、多くの住民が危機感を持ち、率先して避難に徹することができた。
- 地域の犠牲者の内訳としては、避難行動をせずに亡くなった方が22名、避難途中に犠牲になった方が12名、避難先で犠牲になった方が6名であった。
- 大津波警報３m以上という防災無線の情報を信じて、避難場所から駐車場へ戻って車で移動したり、会社や所用先から自宅へ戻るなどの行動をとり、犠牲になった方は５名であった。

3) 震災以前の備え

- 平成22年12月に自主防災組織を設置した。
- 市が実施する津波避難訓練への参加率は20%前後であったが、高校生以下の参加率が低かった。
- 敬老会、明治三陸大津波100回忌慰霊式典等を実施することで、先人の教訓や津波避難の重要性を学び、率先避難・早期避難に徹するという避難意識の醸成を図ってきた。
- 「両石の津波を語る会」を発足させ、地区の小・中学校の防災学習に寄与してきた。
- 軽トラックを利用した救助作戦「15分ルール」の取り決めを計画しており、大震災が発生する１か月前の２月に回覧板による周知を行っていた。

4) 問題点・課題の整理

- 「揺れたらすぐに高台へ避難する」、「避難後、絶対に戻ってはいけない」という先人の教訓を守ることを徹底する。
- 過去の被災経験、想定にとらわれず、高台の安全な場所まで避難することを徹底する。


N
旧 両石保育園
【指定】・【当日避難】・【指定廃止】
1ｍ浸水した
約100名が保育園に避難した。
保育所が浸水したため、更に高台へ避難した。
個人宅の小屋
【当日避難】
約10名が
避難した。
約20名が避難。
車で避難した人もいた。
千島墓地前広場
【指定】・【当日避難】
富澤酒店前で
海を見ていた人が
多数いた。
恋の峠高台
【新指定】
午後3時頃、
国道45号は渋滞していなかったが、次第に渋滞した。
消防団が約10名避難した。
第１波は両石自動車整備工場
付近まで来襲した。
防災無線
約80～90名が避難した。
厳島神社 境内
【指定】・【当日避難】
両石地区コミュニティ消防センター
【当日避難】
厳島神社の参道まで遡上した。
2～3名が避難した。
神社
【当日避難】
防災無線
両石駅
【当日避難】
両石駅とあさひ公園をあわせて
約130名が避難した。
防潮堤で跳ね返った波により、
被害が大きくなった。
特に、第２波が大きかった。
湾内をスルメ釣りの船が引き潮
で行ったり来たりしていた。
防潮堤を越えたとき、津波の
スピードが速まり、来襲した。
あさひ公園
【指定】・【当日避難】
0
50
100ｍ
釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編
3　鵜住居地区
(3)　両石地区
地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.1.21実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。
◆東日本大震災における津波について
：津波到達範囲の境界線
津波の流れや大きさ
◆避難の様子について
主な避難経路や避難の様子
◆町内会の境界について
：町内会の境界線
：町丁目・地割の境界線
◆避難場所について
避難場所の名称
【指定】：東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】：東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】：東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】：東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】：東日本大震災のあとに新たに指定した場所
◆その他
主な地域の施設など
※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した

釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（3）両石地区

地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.1 21実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用

3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(4) 水海地区（両石町第４地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成23年2月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成23年3月3日実施）	
			犠牲者数（平成25年1月22日）	全壊・半壊家屋数（平成25年6月現在）			
水　海	61人	31世帯	0人	全壊12件	半壊13件		

2) 震災当日の津波避難行動実態

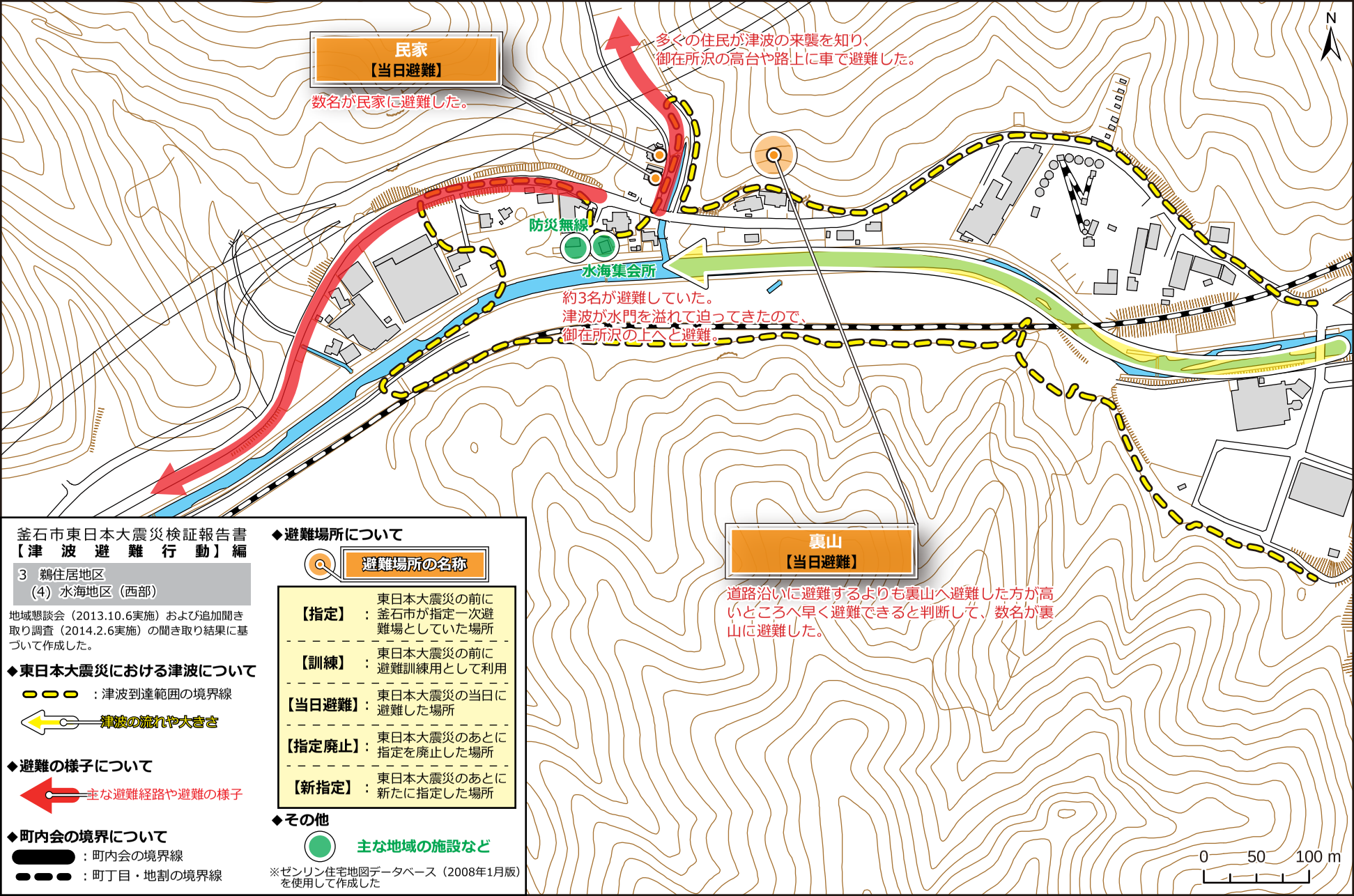
- 住民が各自で避難した。高台へ車で避難していた一部の住民が、徒歩避難者を同乗させて避難したりしていたが、それぞれが避難するのに精一杯であった。
- 地震発生後、速やかに両石インターの高台方面へ避難する住民もいた。地震後、数人で集まり、様子を見ていた方もいた。多数の住民は、屋外で水海川を遡上する津波を見て、それから各自で高台に率先避難した。避難の途中、津波で足が浸された方等はいなかった。
- 地域の指定避難場所は、海岸の水海公園の高台にあり、海水浴客等を主に対象としていた。集落の住家付近に指定避難場所がないため、近くの高台や女遊部方面へ車で避難した方もいた。

3) 震災以前の備え

- 津波が襲来するという意識もなく、避難場所も決まってなかったため、３月３日の避難訓練には参加していなかった。

4) 問題点・課題の整理

- この度の被災では津波犠牲者が出なかったものの、次もこのように無事に避難することができるとは限らない。そのため、日頃から津波に対する意識を持つようにし、地域で避難方法を検討しておく。



釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（4）水海地区（西部）

地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.2.6実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

津波の流れや大きさ

◆避難の様子について

主な避難経路や避難の様子

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

◆避難場所について

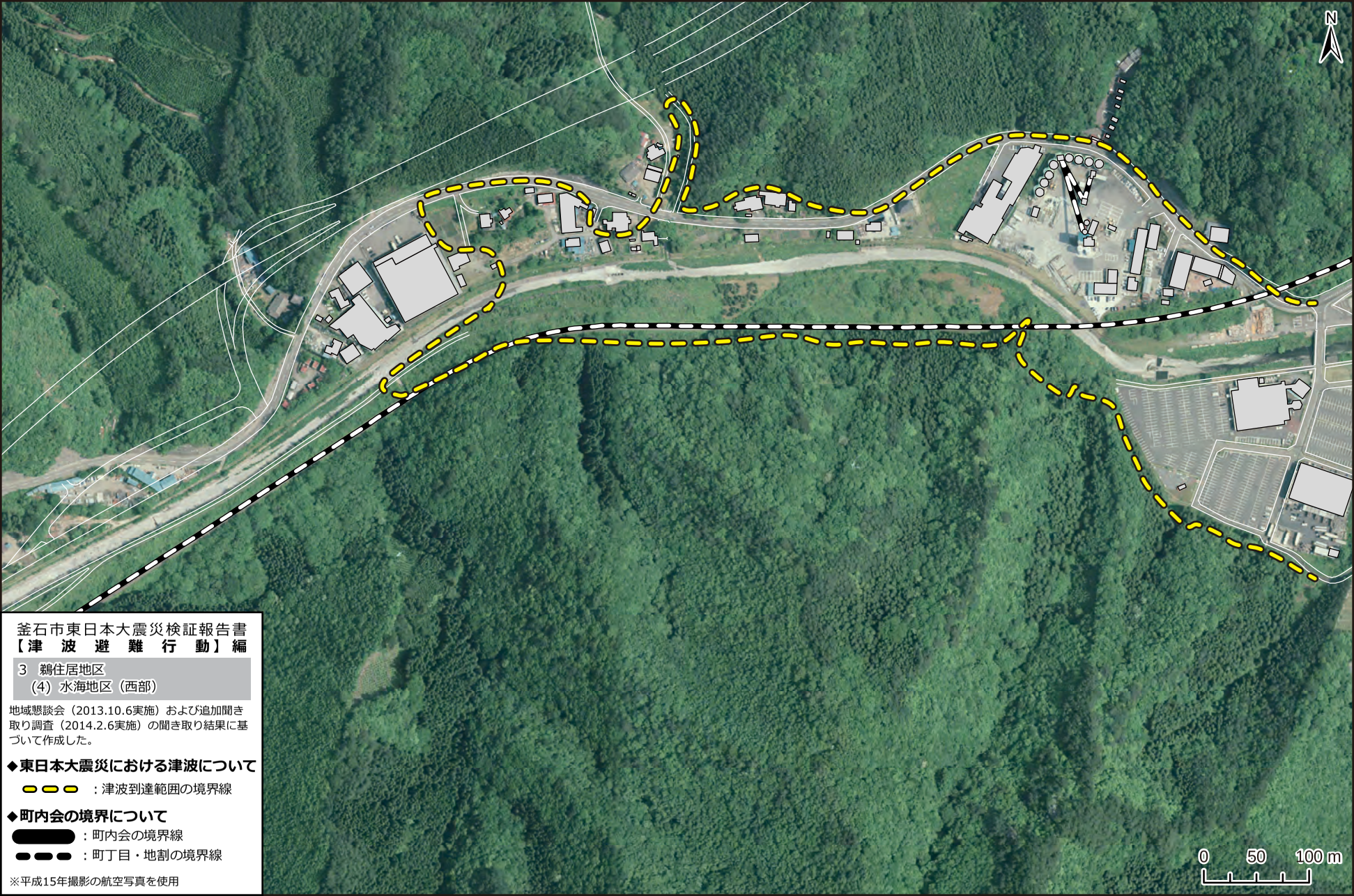
避難場所の名称

【指定】	東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】	東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】	東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】	東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】	東日本大震災のあとに新たに指定した場所

◆その他

主な地域の施設など

※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した



釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（4）水海地区（西部）

地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.2.6実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

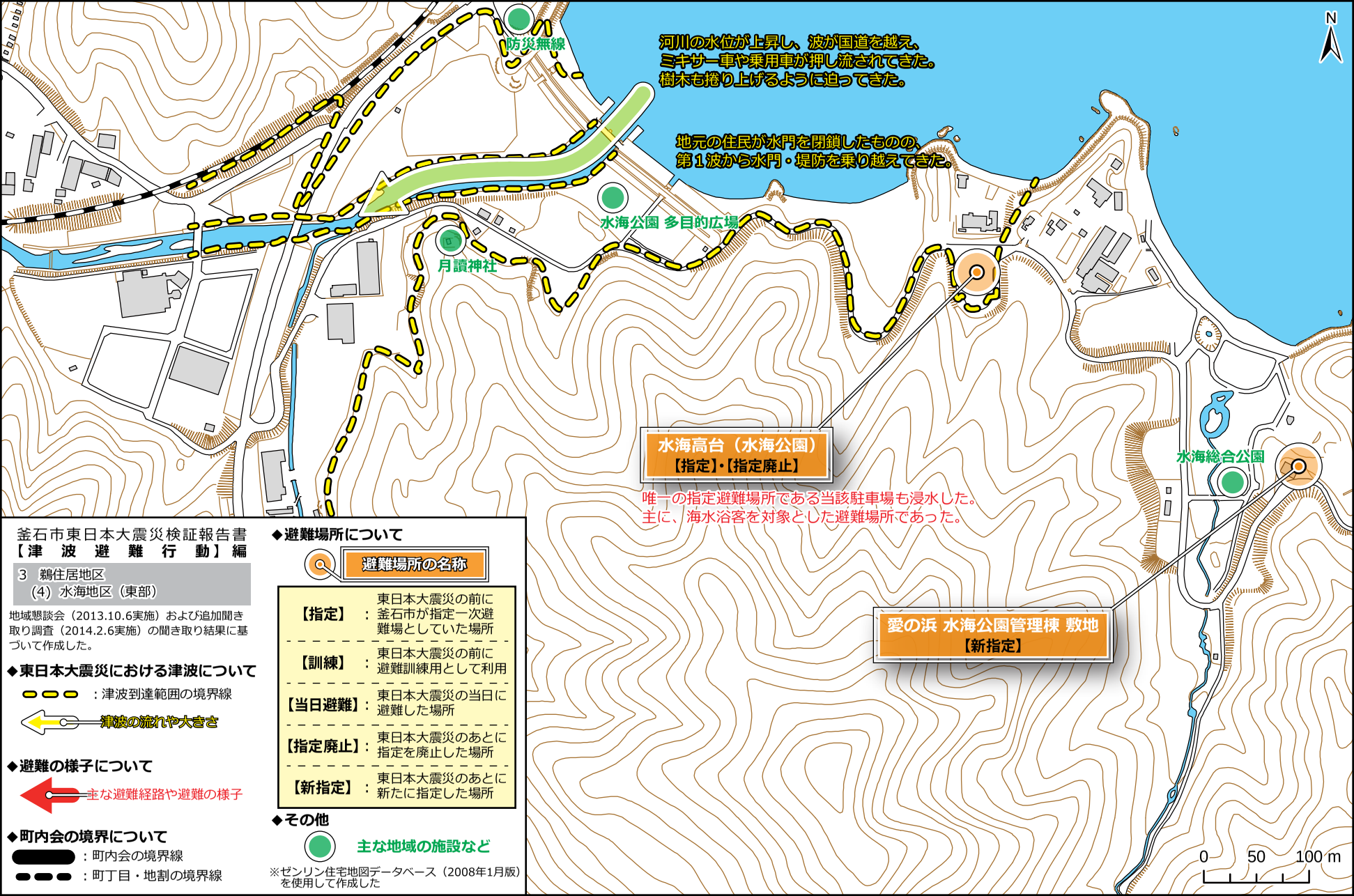
：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用



釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（4）水海地区（東部）

地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.2.6実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

津波の流れや大きさ

◆避難の様子について

主な避難経路や避難の様子

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

◆避難場所について

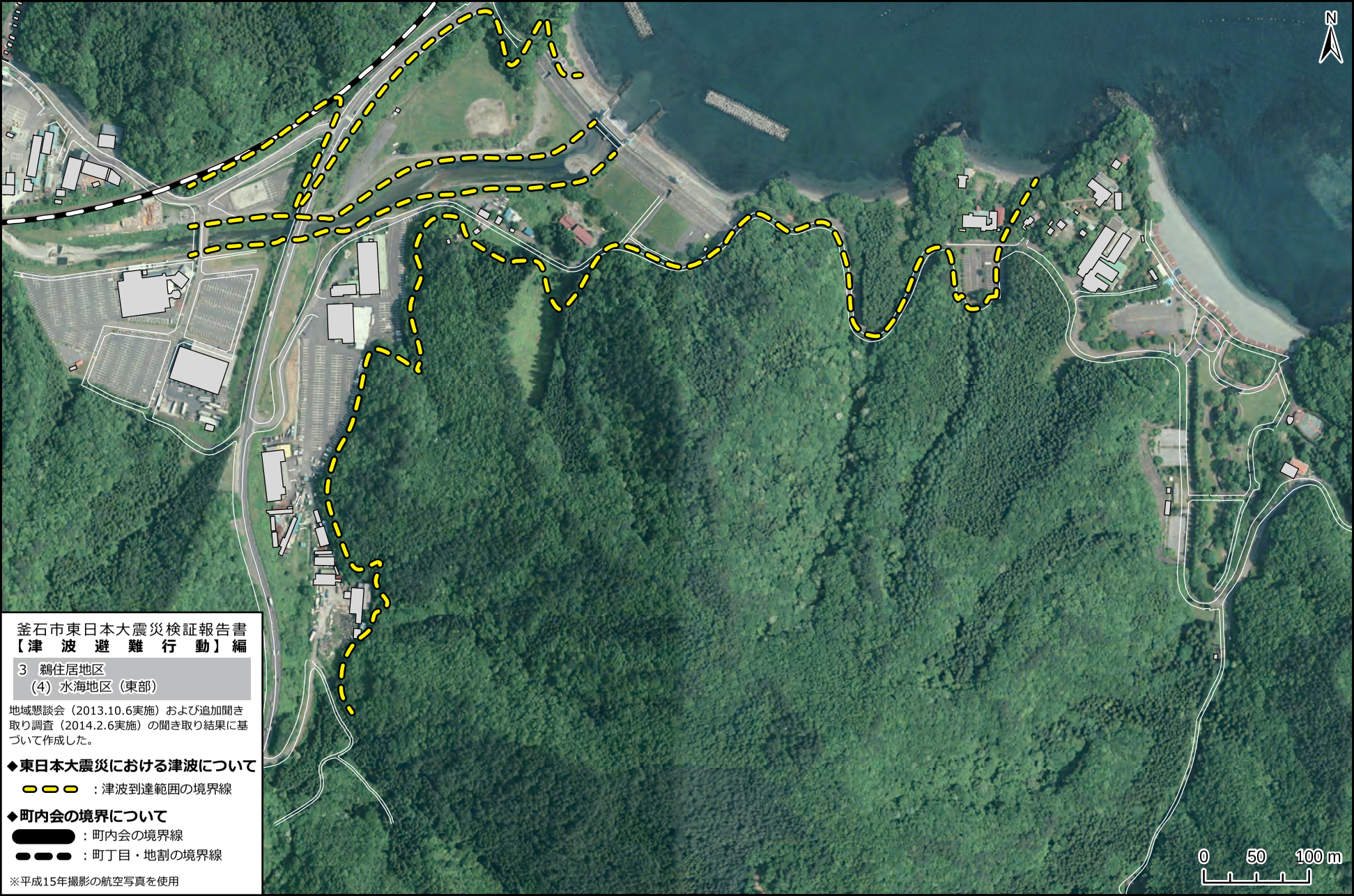
避難場所の名称

【指定】	：東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】	：東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】	：東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】	：東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】	：東日本大震災のあとに新たに指定した場所

◆その他

主な地域の施設など

※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した



釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（4）水海地区（東部）

地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.2.6実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用

3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(5) 片岸地区（片岸町第 1～9 地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成 23 年 2 月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月 3 日実施）	
			犠牲者数（平成 25 年 1 月 22 日）	全壊・半壊家屋数（平成 25 年 6 月現在）			
片　岸	662 人	275 世帯	33 人	全壊 181 件	半壊 18 件	105 人	16%（対象地区：片岸町）

2) 震災当日の津波避難行動実態

- 地震直後、多くの方が指定避難場所へ避難した。津波浸水直前に危険を予知し、更に高台に移動した。
- 迅速に避難した徒歩避難者の多くは、夕方には帰宅できるという思いがあったため、非常持出品の携行も少なく、着の身着のままで避難した。
- 車で避難した方もおり、犠牲になった方が多かった。
- 消防団は水門、スライド式ゲート３箇所を閉鎖後、消防ポンプ車で周辺に避難を呼びかけた。その後、危険が迫ってきたため、道地沢団地に避難した。
- 地域で組織的な避難誘導の実践はなかったが、住民同士が互いに声をかけあい、国道 45 号の通行者、周辺企業の従業員にも避難を促し、人命救助を行った。
- 避難先の高台から津波の襲来が視認できたため、下の車列に急いで避難するように呼びかけたが、声が届かなかった。
- 障がい者の介護等のために一旦自宅に戻り、避難が遅れたり、そこで流された方もいた。
- 買い物や用事のために出かけ、車で帰る途中で津波に流された方、外出先から避難する際に指定避難場所に直行せず、自宅に立ち寄って逃げ遅れた方、津波の状況確認のため、海岸に出かけた方もいた。
- 指定避難場所以外に避難し、そこが浸水したため犠牲となった方もいた。
- 家の中に留まっていたり、２階へ避難して流された方もいた。

3) 震災以前の備え

- 平成 16 年４月に自主防災組織を設置した。あらかじめ役割分担を明確にした組織体制が構築されていたが、地域独自の実践的な訓練は実施していなかった。
- 市の実施による定例的な避難訓練には積極的に協力し参加していた。また、避難訓練時には、指定避難所ごとに集合し、話しあいの機会を持つようにしていた。
- 県のモデル防災会に指定された際には、防災マップ作成ばかりでなく総合的な研修を実施した。

4) 問題点・課題の整理

- 国道沿いで避難のための自動車交通量が多くなることを考慮し、地域住民だけでなく、地域外の住民に対する避難支援方法や誘導方法も検討しておく。
- 指定避難場所等の安全な高台まで避難することを徹底する。

釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（5）片岸地区

地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.1 26実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

津波の流れや大きさ

◆避難の様子について

主な避難経路や避難の様子

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

数名が避難した。

古廟坂トンネル入口付近の高台
【当日避難】・【新指定】

古廟坂高台
【指定】・【当日避難】・【指定廃止】

約40～50名が避難した。

下片岸沢（コタキ沢）
【指定】・【当日避難】・【指定廃止】

車での避難者も数名いた。

海抜11mだが、3m（近隣家屋の２階まで）浸水した

最終的に約170名が避難した。

片岸公葬地
【当日避難】・【新指定】

不動沢
【指定】・【当日避難】

稲荷大明神

第８地割

ポンプ場

第９地割

企業の従業員や国道通行者など約50～60名が避難。
その後、不動沢や片岸公葬地へ避難した。

不動沢の一部
【当日避難】

水門脇と堤防の水門が第２波で決壊したことにより、波の勢いが増大した。

片岸稲荷神社 境内
【指定】・【当日避難】

避難場所は浸水しなかったが、参道の途中まで浸水した

第１波は真直ぐ流れてきた。

防災無線

高台から数名が声をあわせて避難を呼びかけていたが、声が届かなかった。

道地沢団地
【指定】・【当日避難】

自動車学校の生徒や企業の従業員など、多くの人が避難。

第２波以降、２つの波が衝突し、ここで渦を巻いた。引き波と寄せ波の関係で、従来とは異なる激しい渦巻きが発生していた。

第４地割

第２地割

第７地割

防災無線

第１地割

釜石自動車学校

地震発生時、船に乗っていた人によると、地震の音は海面上を伝わり、海底から次第に濁り始めた。

第３地割

第５地割

第６地割

これまでは、このあたりの堤防が頻繁に崩れていたので、昭和49年に高さを6.4mまでかさ上げした。
今回は第３波で決壊した。

0　50　100 m

◆避難場所について

避難場所の名称

【指定】	：東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】	：東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】	：東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】	：東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】	：東日本大震災のあとに新たに指定した場所

◆その他

主な地域の施設など

※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した

釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（5）片岸地区

地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.1.26実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

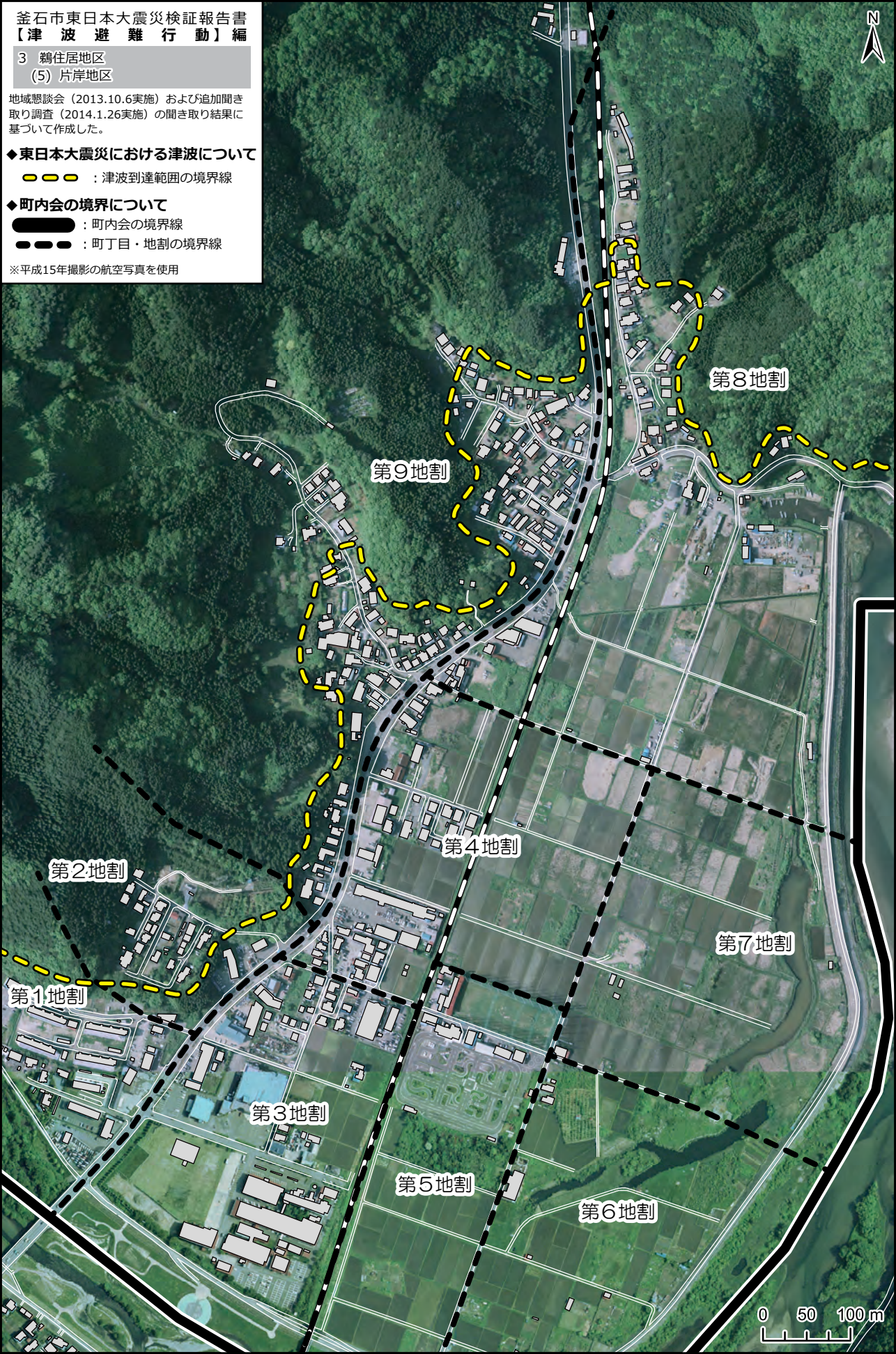
：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用



3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(6) 室浜地区（片岸町第 10 地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成 23 年 2 月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月 3 日実施）	
			犠牲者数（平成 25 年 1 月 22 日）	全壊・半壊家屋数（平成 25 年 6 月現在）			
室　浜	197 人	78 世帯	21 人	全壊 83 件	半壊 3 件	80 人	41%（対象地区：室浜）

2) 震災当日の津波避難行動実態

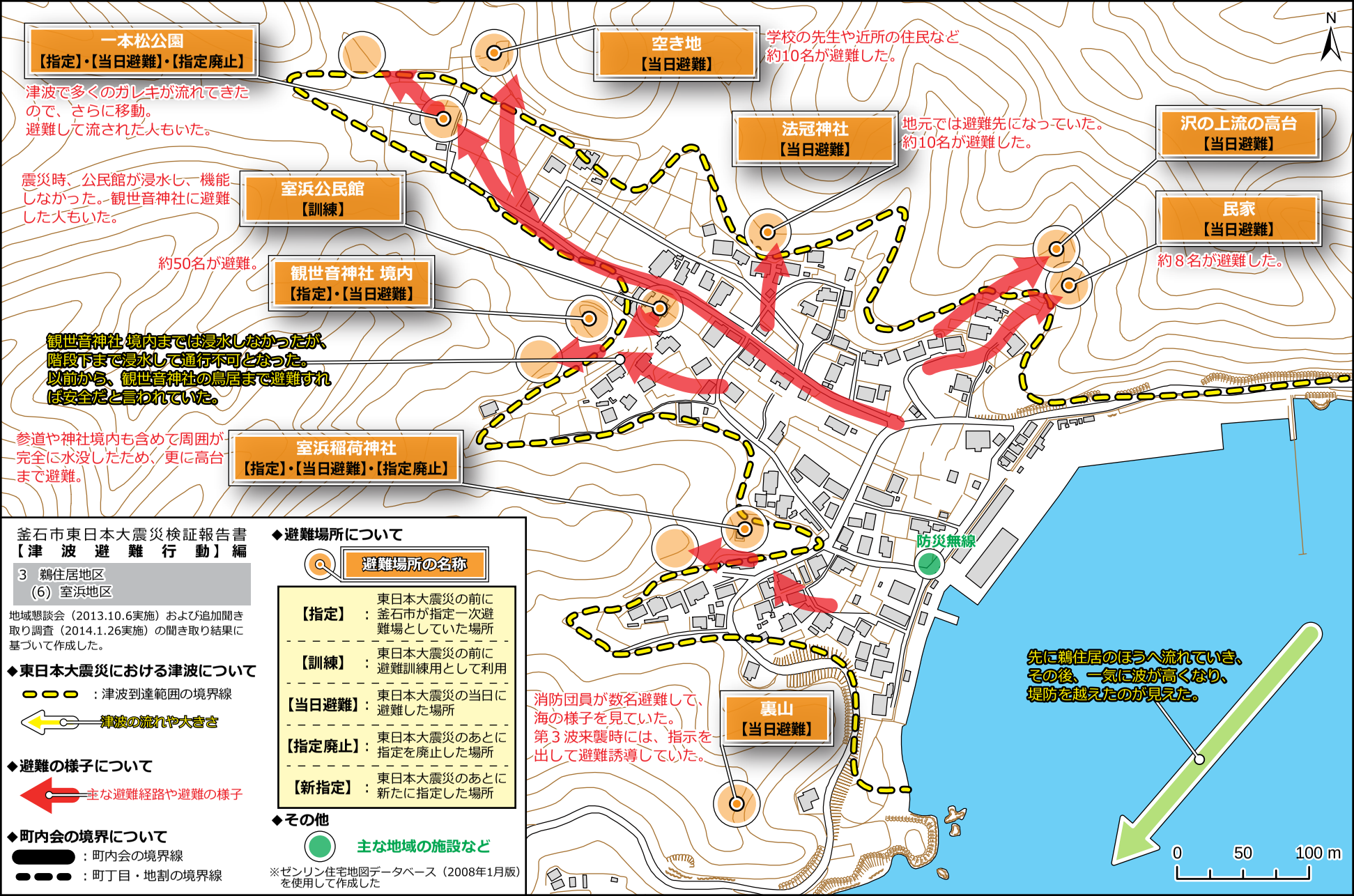
- 多くの住民が、地震直後に指定避難場所へ避難した。しかし、そこにも津波が襲来したため、一部の避難者はより高台へ逃れた。
- 海側の地区では迅速に避難しているが、比較的高台の地区では、ここまで津波は来ないと考え、避難しなかった方もいた。そのため、犠牲になった方の多くは家の中にいて、流された。
- 車で避難した方も数名いた。一本松公園まで車で逃げて流された方もいた。また、身体の不自由な方も、車で避難しようとして流された。
- 一度避難したが、自宅へ戻ってしまい、流された方もいた。

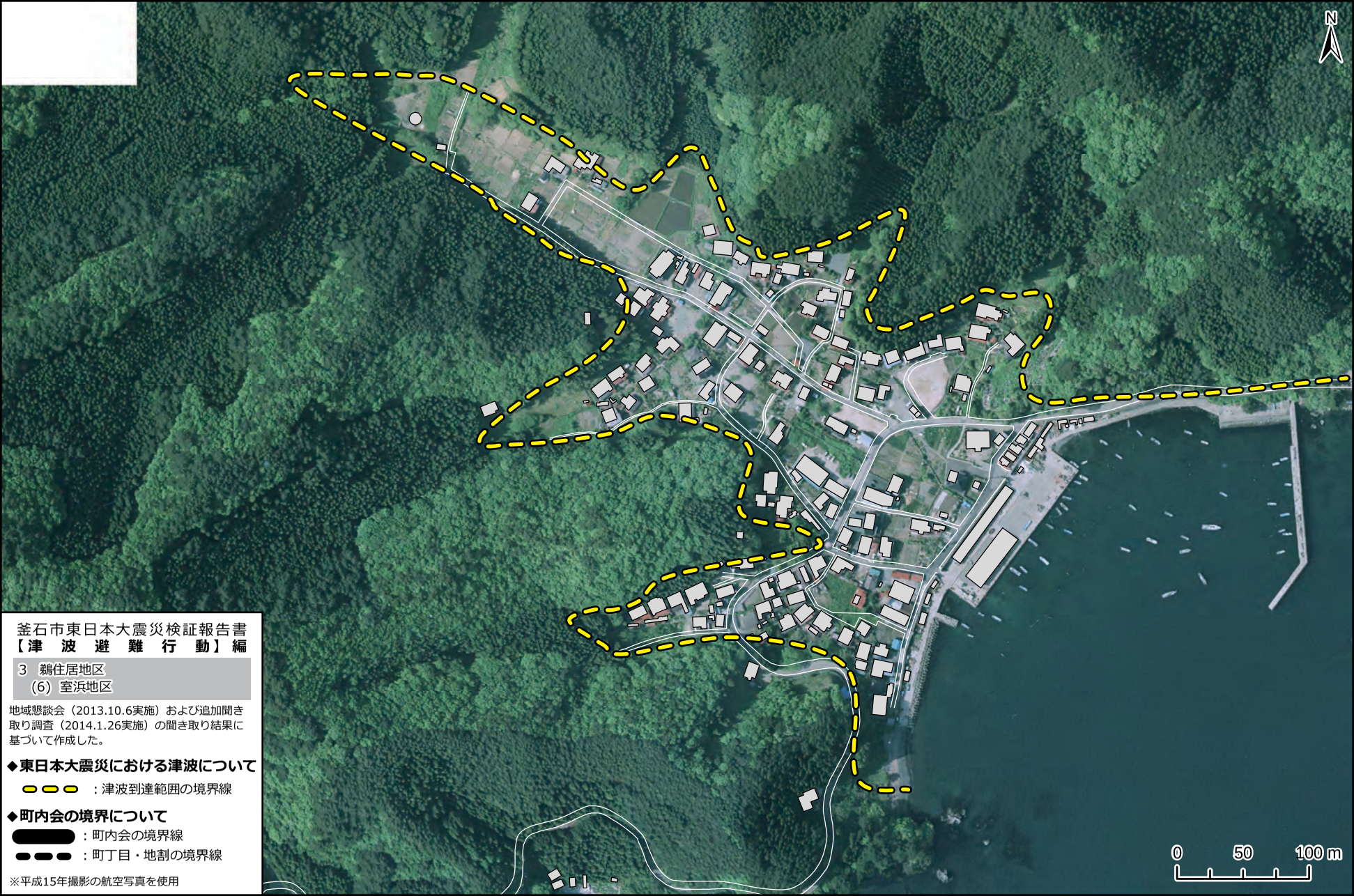
3) 震災以前の備え

- 平成 22 年７月に自主防災組織を設置した。救護係等の担当も決めていた。同年 11 月には、鵜住居の消防に協力してもらい、避難訓練や消火訓練を実施した。
- 訓練の時には、主に公民館前（観世音神社の階段下）、室浜稲荷神社、一本松公園の３か所に集合していた。高齢者の方が参加しやすいように、地区の中心にある公民館を避難場所としていた。
- 避難訓練では指定避難場所への避難よりも、とにかく高い所に逃げる訓練をしていた。その際、高台の住民は海側へ下がってはいけない、また海側の住民は高台へ声がけをして避難するように取り決めていた。

4) 問題点・課題の整理

- 過去の被災経験、想定にとらわれず、高台の安全な場所まで避難することを徹底する。
- 自動車で避難している途中で被災している方も少なくないことから、津波避難時の自動車利用について地域で検討し、「原則、自動車避難の禁止」を徹底する。


N
一本松公園
【指定】・【当日避難】・【指定廃止】
津波で多くのガレキが流れてきたので、さらに移動。
避難して流された人もいた。
空き地
【当日避難】
学校の先生や近所の住民など約10名が避難した。
法冠神社
【当日避難】
地元では避難先になっていた。約10名が避難した。
沢の上流の高台
【当日避難】
震災時、公民館が浸水し、機能しなかった。観世音神社に避難した人もいた。
室浜公民館
【訓練】
民家
【当日避難】
約８名が避難した。
約50名が避難。
観世音神社 境内
【指定】・【当日避難】
観世音神社 境内までは浸水しなかったが、階段下まで浸水して通行不可となった。
以前から、観世音神社の鳥居まで避難すれば安全だと言われていた。
参道や神社境内も含めて周囲が完全に水没したため、更に高台まで避難。
室浜稲荷神社
【指定】・【当日避難】・【指定廃止】
防災無線
消防団員が数名避難して、海の様子を見ていた。
第３波来襲時には、指示を出して避難誘導していた。
裏山
【当日避難】
先に鵜住居のほうへ流れていき、その後、一気に波が高くなり、堤防を越えたのが見えた。
0
50
100 m
釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編
3　鵜住居地区
（6）室浜地区
地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.1.26実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。
◆東日本大震災における津波について
：津波到達範囲の境界線
津波の流れや大きさ
◆避難の様子について
主な避難経路や避難の様子
◆町内会の境界について
：町内会の境界線
：町丁目・地割の境界線
◆避難場所について
避難場所の名称
【指定】：東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】：東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】：東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】：東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】：東日本大震災のあとに新たに指定した場所
◆その他
主な地域の施設など
※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した



釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（6）室浜地区

地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.1.26実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用

3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(7) 箱崎白浜地区（箱崎町第 1～3 地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成 23 年 2 月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月 3 日実施）	
			犠牲者数（平成 25 年 1 月 22 日）	全壊・半壊家屋数（平成 25 年 6 月現在）			
箱崎白浜	387 人	133 世帯	42 人	全壊 52 件	半壊 13 件	66 人	17%（対象地区：箱崎白浜）

2) 震災当日の津波避難行動実態

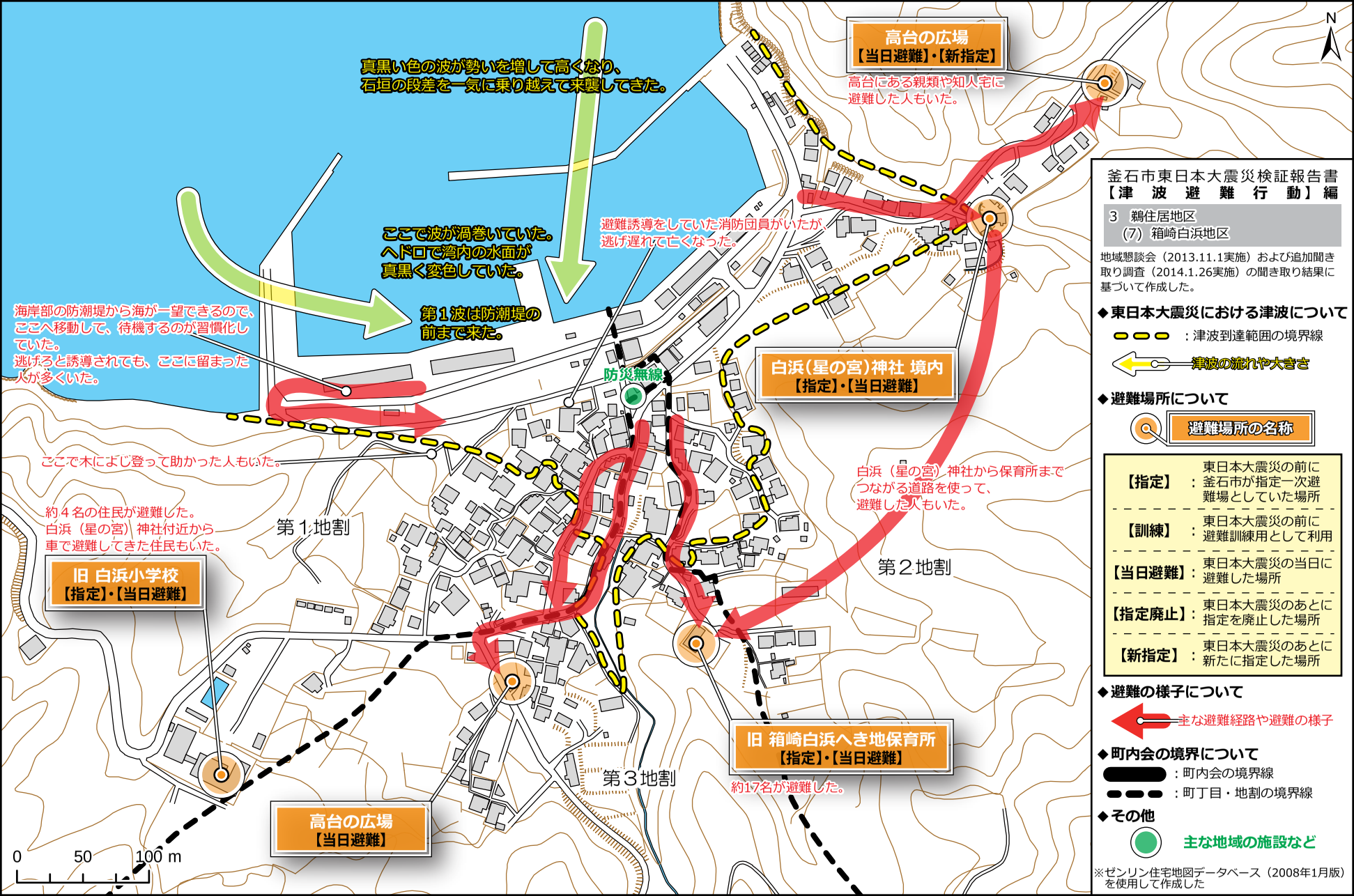
- 地形上、海の様子が各自宅から見えるので、大部分の住民は自宅におり、津波襲来の寸前まで避難しなかった方が多かった。
- 海岸部で作業をしていた方は、防潮堤の上で海の様子を見るのが習慣化していた。津波が襲来したのを見てから、急いで車で高台に移動した。命を取り留めた方もいたが、車ごと流されて犠牲になった方も多くいた。
- 海岸部の住民の多くは車で避難し、高台の住民は徒歩で避難した方が多かった。
- 明治三陸津波や昭和三陸津波の浸水被害を基準として考えていたため、まさか津波がこれほど早く来るとは思わなかったという方が多くいた。
- 周辺の住民からの避難の呼びかけに応じなかった方や、体の不自由な方が自宅で流された。
- 一度避難したが、海の状況が気になり、再び海側に下がってしまい、流された方もいた。
- 消防団員が、住民への避難誘導の呼びかけに時間を要してしまい、流された。

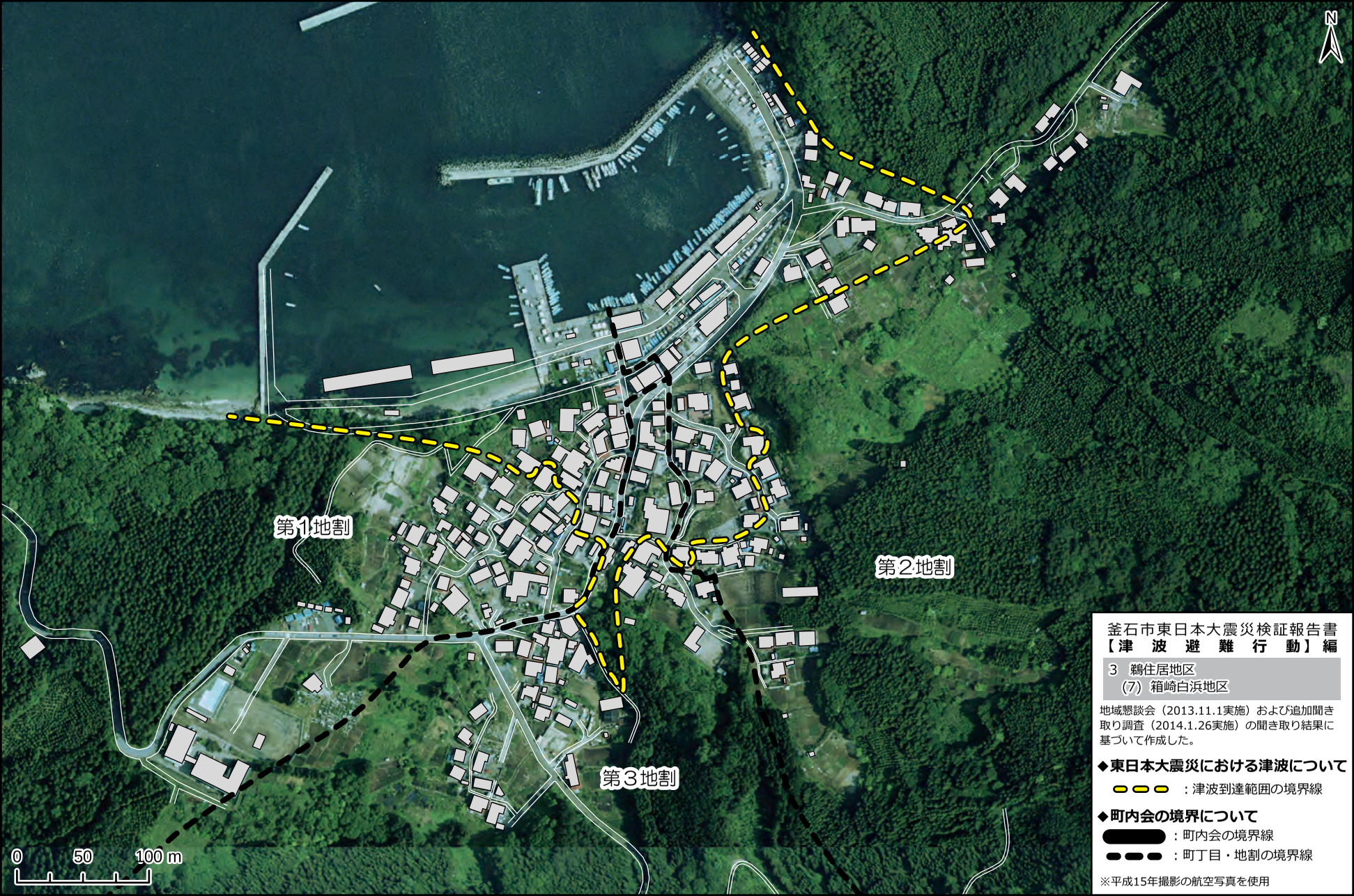
3) 震災以前の備え

- 平成 14 年８月に自主防災組織を設置した。消火、炊き出しの訓練を過去に行ったことがある。
- ３月３日の避難訓練には全面的に協力していた。
- 要援護者の聞き取り調査も行っていたが、具体的な支援方法についての取決めはなかった。

4) 問題点・課題の整理

- 「地震がおきたら、海の様子を確認する」というこれまでの習慣が避難の開始を遅らせ、そのために多くの住民が犠牲となってしまったことから、「揺れたらすぐに高台へ避難する」ことを日頃から徹底する。
- 消防団だけでなく、地域住民による避難の呼びかけ、避難支援方法を地域として検討し、地域住民全員でそれに従うことを徹底する。


釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編
3　鵜住居地区
(7)　箱崎白浜地区
地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.1.26実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。
◆東日本大震災における津波について
：津波到達範囲の境界線
津波の流れや大きさ
◆避難場所について
避難場所の名称
【指定】：東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】：東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】：東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】：東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】：東日本大震災のあとに新たに指定した場所
◆避難の様子について
主な避難経路や避難の様子
◆町内会の境界について
：町内会の境界線
：町丁目・地割の境界線
◆その他
主な地域の施設など
※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した
N
真黒い色の波が勢いを増して高くなり、
石垣の段差を一気に乗り越えて来襲してきた。
高台の広場
【当日避難】・【新指定】
高台にある親類や知人宅に
避難した人もいた。
ここで波が渦巻いていた。
ヘドロで湾内の水面が
真黒く変色していた。
避難誘導をしていた消防団員がいたが、
逃げ遅れて亡くなった。
第１波は防潮堤の
前まで来た。
海岸部の防潮堤から海が一望できるので、
ここへ移動して、待機するのが習慣化し
ていた。
逃げろと誘導されても、ここに留まった
人が多くいた。
防災無線
白浜（星の宮）神社 境内
【指定】・【当日避難】
ここで木によじ登って助かった人もいた。
白浜（星の宮）神社から保育所まで
つながる道路を使って、
避難した人もいた。
約４名の住民が避難した。
白浜（星の宮）神社付近から
車で避難してきた住民もいた。
第１地割
第２地割
第３地割
旧 白浜小学校
【指定】・【当日避難】
旧 箱崎白浜へき地保育所
【指定】・【当日避難】
約17名が避難した。
高台の広場
【当日避難】
0　50　100 m



釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
(7)　箱崎白浜地区

地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.1.26実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用

3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(8) 仮宿地区（箱崎町第４地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成23年2月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成23年3月3日実施）	
			犠牲者数（平成25年1月22日）	全壊・半壊家屋数（平成25年6月現在）			
仮　宿	80人	28世帯	7人	全壊11件	半壊2件	25人	31%（対象地区：仮宿）

2) 震災当日の津波避難行動実態

- 地震後、住民の多くは自宅にいた。あるいは近所の家に数人で集まった。その中には避難せずに自宅にとどまり、流された方もいた。
- 海岸部に近い住民は、比較的早く高台へ避難した。
- 普段から地震が来ても海の様子が気になり、海岸部に下がってしまうという習慣があった。この度の津波においても、避難の途中で家に引き返してしまい、流された方がいた。また、高台へ避難する際にも、海岸を眺めながら避難していた。
- 車で避難した方が多かった。

3) 震災以前の備え

- 平成22年10月に自主防災組織を設置した。
- 市が実施した３月３日の避難訓練に参加していたほか、町内会、消防団で自主的に避難訓練をしていた。
- 他地域に比べて人口が少なく、高齢者の多い集落であるため、隣近所で支えあうコミュニティが築かれていた。

4) 問題点・課題の整理

- 「地震がきたら海の様子を見に行く」というこれまでの習慣が避難の開始を遅らせ、そのために多くの住民が犠牲となってしまったことから、「揺れたらすぐに高台へ避難する」ことを日頃から徹底する。
- 地域のつながりを生かした避難支援方法を検討し、地域住民全員がそれに従うことを徹底する。

釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（8）仮宿地区

地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.1.24実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

津波の流れや大きさ

◆避難場所について

避難場所の名称

【指定】	：東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】	：東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】	：東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】	：東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】	：東日本大震災のあとに新たに指定した場所

◆避難の様子について

主な避難経路や避難の様子

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

◆その他

主な地域の施設など

※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した

N

鵜住居公民館 仮宿分館
【当日避難】

公民館に約30名が避難。
各自で避難した後、公民館に集まることにしていた。

数名が避難した。

屯所
【当日避難】

仮宿高台
【指定】・【当日避難】

空き地
【当日避難】

津波は沢を遡上してきた。

三貫島神社

防災無線

約２名、山へ避難した。

防波堤まで水が引き、底が見えていた。
その後、防波堤を越えてムクムクと水が上がってきた。

津波来襲時、海面上にガスが雲のように広がっていた。海が光っていたため、海の様子が見えにくかった。

0　50　100 m

釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（8）仮宿地区

地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.1.24実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用

3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(9) 箱崎地区（箱崎町第 5～12 地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成 23 年 2 月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月 3 日実施）	
			犠牲者数（平成 25 年 1 月 22 日）	全壊・半壊家屋数（平成 25 年 6 月現在）			
箱　崎	734 人	273 世帯	61 人	全壊 208 件	半壊 27 件	74 人	10%（対象地区：箱崎）

2) 震災当日の津波避難行動実態

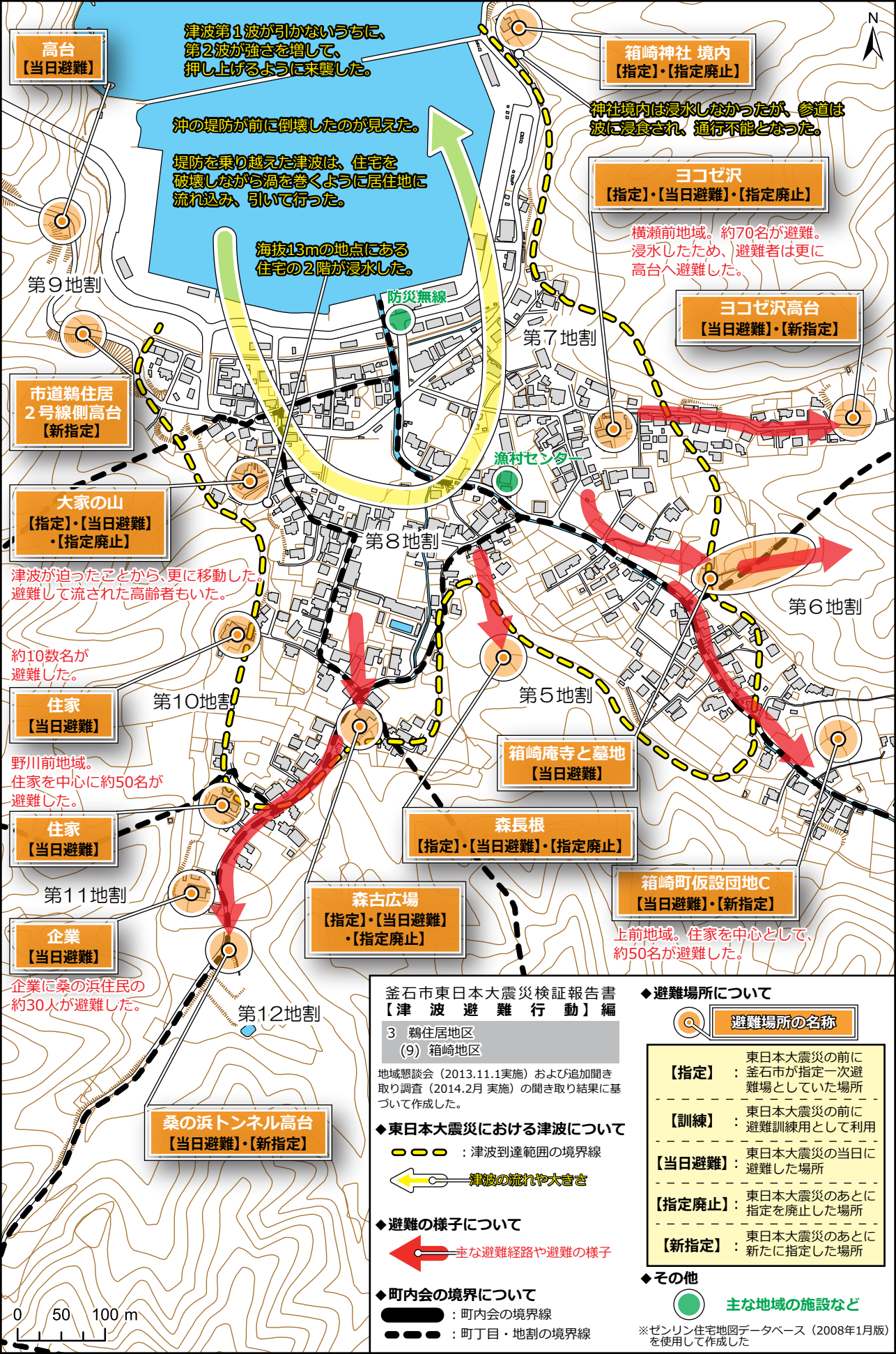
- 地震直後、地区の一部の住民は、屋外や路上に出て、相互に声をかけあい、高齢者等の避難を補助しつつ、高台・親類宅へ避難した。
- 海岸部で働いていた住民も多数あったが、地震直後に一斉に避難せず、自宅等に戻ったりしていた。
- 多くの住民は「津波はすぐ来ない」、「ここまでは来ない」という意識が強く、高台だけでなく、海側でも避難しない、避難が遅れるケースが多数あった。
- 馬場前地域の一部、上前地域の一部では避難場所に避難したものの、更に上に避難した。
- 寝たきりの高齢者が避難できずに流された。
- 津波避難場所ではなく、親類・知人宅に避難したため津波に流された方もいた。
- 地震発生後、すぐに避難せずにどこかに立ち寄った方（親類のもとに避難を呼びかけに行った、家族の救助又は物を取りに自宅に戻った。海の様子を見に行ったり、海の様子に見に行った家族を呼びに行った）が流された。

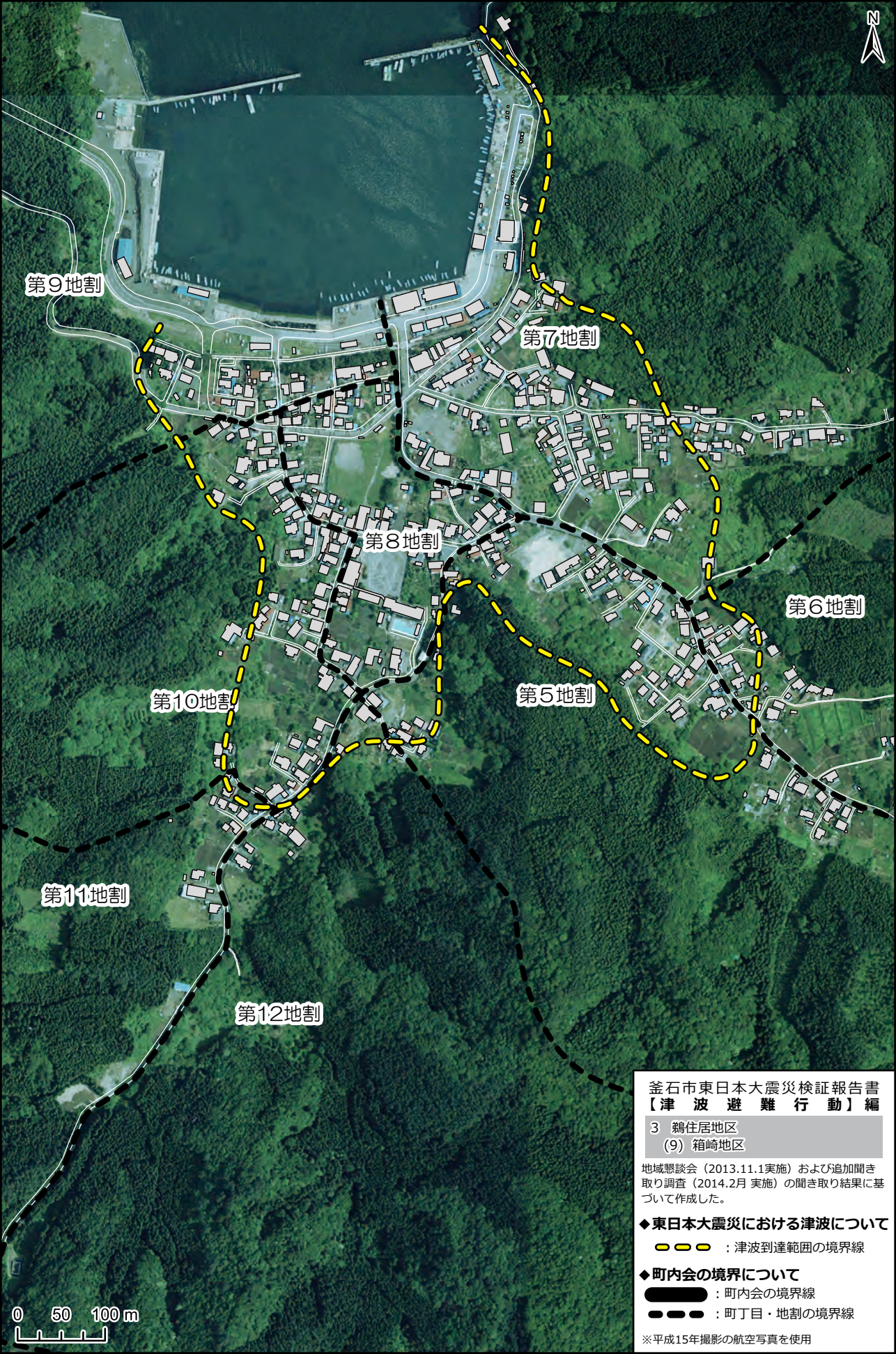
3) 震災以前の備え

- 平成 22 年７月に自主防災組織を設置し、組織図を総会で確認していた。発電機やテントなどの必要な備品について整備計画を立てていた。
- 避難訓練は、３月３日の市が実施している避難訓練のみで、町内独自の訓練は実施していなかった。
- 地域の避難場所について、見直しが必要ではないかとの声もあったが対応はできていなかった。

4) 問題点・課題の整理

- 想定にとらわれず、揺れたらすぐに高台へ避難することを徹底する。
- 近くの安全な高台への避難を第一に考え、地域で避難場所を検討するとともに、そこを使った避難訓練を実施する。


N
高台
【当日避難】
津波第１波が引かないうちに、
第２波が強さを増して、
押し上げるように来襲した。
沖の堤防が前に倒壊したのが見えた。
堤防を乗り越えた津波は、住宅を
破壊しながら渦を巻くように居住地に
流れ込み、引いて行った。
海抜13mの地点にある
住宅の２階が浸水した。
箱崎神社 境内
【指定】・【指定廃止】
神社境内は浸水しなかったが、参道は
波に浸食され、通行不能となった。
ヨコゼ沢
【指定】・【当日避難】・【指定廃止】
横瀬前地域。約70名が避難。
浸水したため、避難者は更に
高台へ避難した。
ヨコゼ沢高台
【当日避難】・【新指定】
第９地割
防災無線
第７地割
市道鵜住居
２号線側高台
【新指定】
漁村センター
大家の山
【指定】・【当日避難】
・【指定廃止】
第８地割
津波が迫ったことから、更に移動した。
避難して流された高齢者もいた。
第６地割
約10数名が
避難した。
住家
【当日避難】
第10地割
第５地割
箱崎庵寺と墓地
【当日避難】
野川前地域。
住家を中心に約50名が
避難した。
住家
【当日避難】
森長根
【指定】・【当日避難】・【指定廃止】
第11地割
森古広場
【指定】・【当日避難】
・【指定廃止】
箱崎町仮設団地C
【当日避難】・【新指定】
上前地域。住家を中心として、
約50名が避難した。
企業
【当日避難】
企業に桑の浜住民の
約30人が避難した。
第12地割
桑の浜トンネル高台
【当日避難】・【新指定】
0 50 100 m
釜石市東日本大震災検証報告書
【津 波 避 難 行 動】編
3 鵜住居地区
(9) 箱崎地区
地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.2月 実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。
◆東日本大震災における津波について
：津波到達範囲の境界線
津波の流れや大きさ
◆避難の様子について
主な避難経路や避難の様子
◆町内会の境界について
：町内会の境界線
：町丁目・地割の境界線
◆避難場所について
避難場所の名称
【指定】：東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】：東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】：東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】：東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】：東日本大震災のあとに新たに指定した場所
◆その他
主な地域の施設など
※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した



釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（9）箱崎地区

地域懇談会（2013.11.1実施）および追加聞き取り調査（2014.2月 実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用

3．地域の避難実態（とりまとめ結果）

3.3　鵜住居地区　　(10) 桑の浜地区（箱崎町第 13 地割）

1) 地域の被災状況

地域名	震災前の人口・世帯数（平成 23 年 2 月現在）		大震災の被害			避難訓練参加者数・参加率（平成 23 年 3 月 3 日実施）	
			犠牲者数（平成 25 年 1 月 22 日）	全壊・半壊家屋数（平成 25 年 6 月現在）			
桑の浜	121 人	52 世帯	3 人	全壊 43 件	半壊 6 件	30 人	25%（対象地区：桑の浜）

2) 震災当日の津波避難行動実態

- 水門を閉鎖後、地域の全住民は防潮堤水門外の高台方向にいた。
- 一部の住民は、地震直後から、指定避難場所のほか、それぞれ住家のある沢の高台に避難した。
- 防潮堤から津波が溢れ出る状況により、徐々に高台に避難する住民もいた。
- 指定避難場所も津波の危険が迫ったため、更にトンネル方向の高台に避難した。
- 一時、高台に避難したものの、逃げ遅れた方の確認、救助のため海岸方向に下る住民もいた。

3) 震災以前の備え

- ３月３日の避難訓練には、地域で通常 15 名程度が参加し、同じ顔ぶれが多かった。
- 災害発生時、消防団とともに、炊き出しなどの役割を決める動きがあったが、今回の震災時には具体化できなかった。

4) 問題点・課題の整理

釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（10）桑の浜地区

地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.2.2実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

津波の流れや大きさ

◆避難場所について

避難場所の名称

【指定】	：	東日本大震災の前に釜石市が指定一次避難場としていた場所
【訓練】	：	東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】	：	東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】	：	東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】	：	東日本大震災のあとに新たに指定した場所

◆避難の様子について

主な避難経路や避難の様子

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

◆その他

主な地域の施設など

※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した

N

30名以上が避難。
浸水はしなかったが、数m手前まで波が来たことから更に高台に避難した。
箱崎町からの避難者もいた。

桑の浜高台
【指定】・【当日避難】・【指定廃止】

桑の浜トンネル方向高台
【指定】・【当日避難】・【新指定】

この高台に約30人が並んで、海の様子を見ていた。

筋川稲荷神社
【当日避難】

数名が避難した。
翌日に桑の浜トンネル方向高台の避難者と合流した。

防災無線

近隣の住民や漁業関係者、約10名が避難した。

道路
【当日避難】

定置網施設

第２波、第３波が来襲する中、上へと避難した。

高台
【当日避難】

約15名が避難した。
細道を通って、高台に避難した。

強烈な引き波とともに、水門の扉が外れた。

多くの住民は、津波が来る前は水門にいた。
第２波が防潮堤を越えるのを見て、更に上へ避難した。

両石湾の水が一瞬で勢いよく引き、底が見えた。
灯台の下まで見えていた。海が盛り上がって、まもなく第３波の高波が押し寄せてきた。

0　50　100 m

釜石市東日本大震災検証報告書
【津　波　避　難　行　動】編

3　鵜住居地区
（10）桑の浜地区

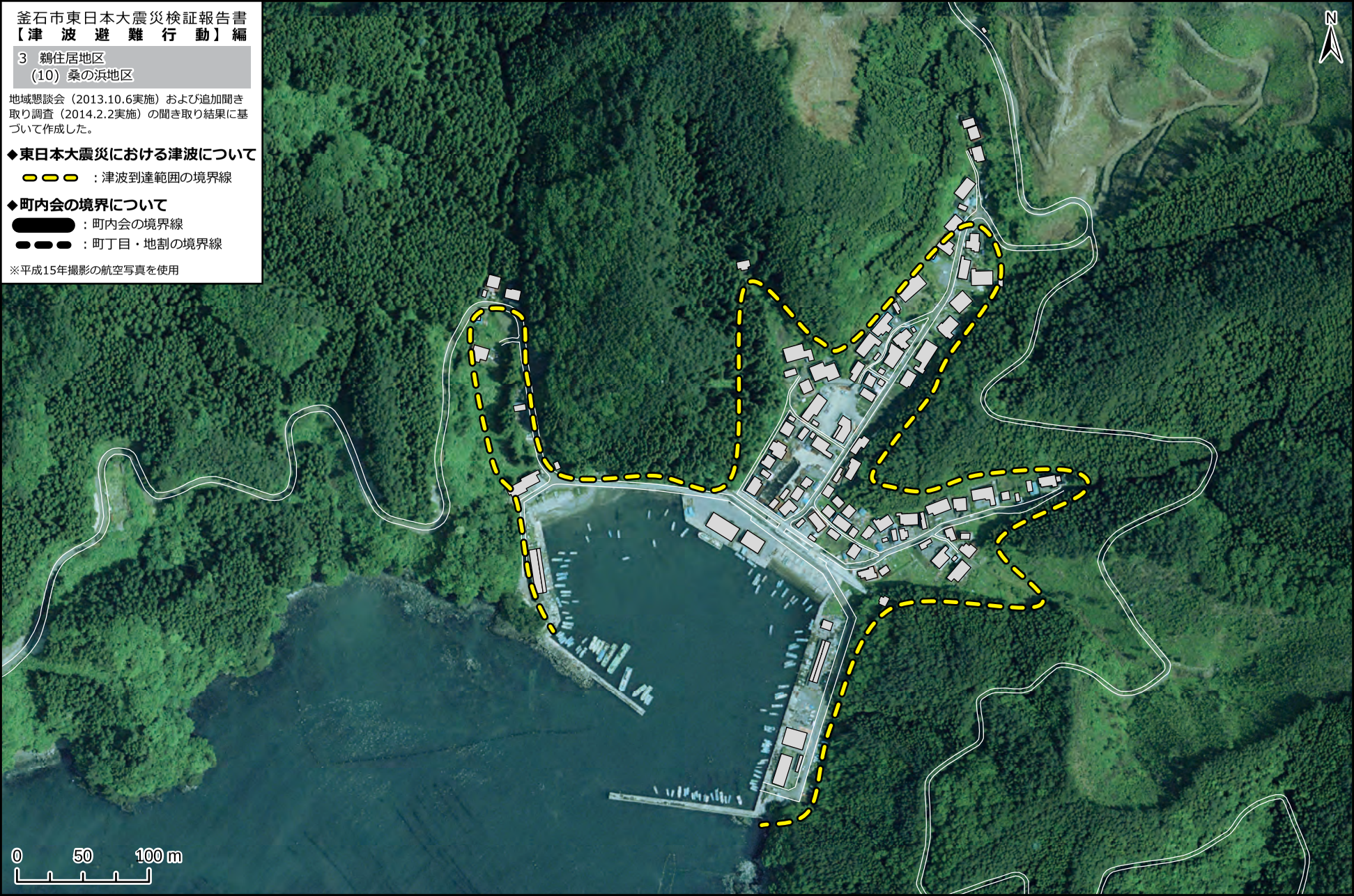
地域懇談会（2013.10.6実施）および追加聞き取り調査（2014.2.2実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

：津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用